

雲貴高原東部におけるミャオ族の生業形態

貴州省・黎平県口江郷揀東村を事例として

田畑久夫

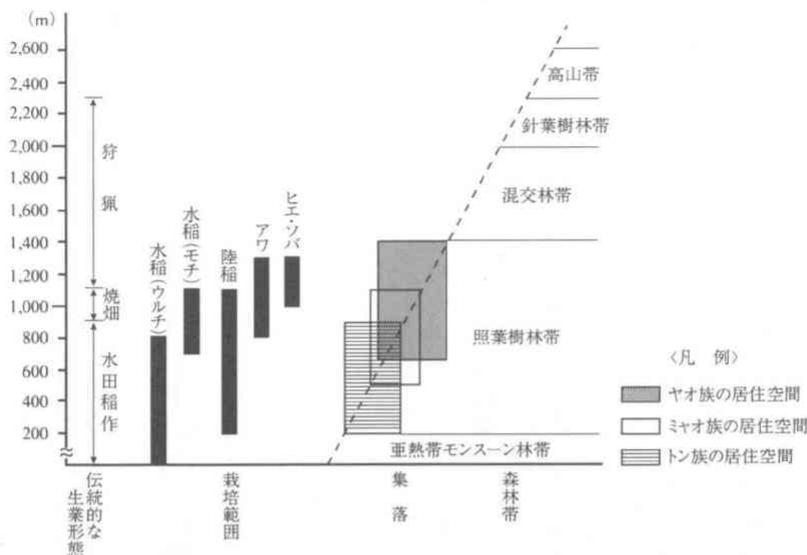
一 問題の所在と研究視角

ミャオ族は、西南中国を代表する高原である雲貴高原を中心に分布・居住している民族集団である。同高原には、このミャオ族を筆頭に、シユイ族・トン族・ヤオ族・イ族など多数の民族集団が所狭しと、分布・居住している。しかも、かかる雲貴高原では、水利に恵まれた土地条件の良好な平坦地には、主として明および清王朝時代に屯田兵としてこの地に移住した漢民族の子孫が占有している。そのため、ミャオ族などの民族集団のほとんどはその影響を強

く受け、土地条件の劣悪な山間部を主体に居住することになった。

しかし、このように、山間部を主体に分布・居住するのではなく、民族集団ごとには海抜高度差による住み分けを行なっているという特色を有している。本稿の対象地域である雲貴高原東部の山間部においても、第1図にみられるように、住み分けが明確に認められる。かかる住み分けが行なわれるようになったのは、上述の漢民族の進出および各民族集団間の抗争などによると考えられる。

第1図からも判明するように、典型的な山棲みの民族集



第1図 雲貴高原東部における山棲みの民族集団の住み分けモデル
出所：現地での聞き取りなどより作成。

団であるミャオ族は、その分布範囲が、中国領にとどまらず、国境を越えてタイ・ラオス・ベトナムなどインドシナ半島北部の山岳地帯にまで進出している。かように、西南中国を中心に国境を越えて周辺地域にまで分布・居住している民族集団としては、同様に代表的な山棲みの民族集団であるヤオ族だけである。

以上論じたように、ミャオ族の分布・居住範囲すなわち生活空間は非常に広範囲にわたっていると見える。しかも、人口に関しても、少数民族としては第五位の人口（約七四〇万人弱）を擁する大集団である。そのため、ミャオ族に関しては、多くの分派集団に分かれていることが確認されている。かようなミャオ族の分派集団は、従来から主として女性が着用している民族衣裳の色彩を中心に分類されることが多かった。というのは、ミャオ族の場合、ごく最近まで女性が「ハレ」の日のみならず、日常生活においても民族衣裳を常用していた。それ故、視覚的にも区分することが容易であったからである。かような理由から、現地においては、かかる分類が地元の研究者を含めて一般的に使用されている。しかしながら、かような分類は便宜的な区分にすぎないとされ、中央の研究者レベルでは、第1表に示したように方言を主体とする言語系統による分類が中心となっている。

この他、ミャオ族に関する分類として、ミャオ族社会の

第1表 言語からみたミャオ族の区分

区分の基準	名称	主要分布地域	自称	出所
言語 (方言)	東部集団	A. 貴州東南方言地区 貴州省黔東南、湖南省(城步) 広西壮族自治区(大苗山)	ムウ ----- モー	村松一弥 (1973)
		B. 湖南西部方言地区 湖南省(湘西) 貴州省東北端 湖北省(鶴峰・宣恩など)	コ・ソン ----- ソ ----- ク・スワン	
	西部集団	C. 黔南・川南・滇東方言地区 貴州省南部、雲南省(文山・屏 辺)、四川省(叙永・秀山など)	モン	
		D. 黔西北、滇東北方言地区 貴州省(威寧)、雲南省北部山 岳地帯	ミャオ	
言語 (方言)	湖西方言	湖南省西部、貴州省松桃、四川省秀 山、湖北省(來鳳・鶴峰)	コ・ション	国家民族委員会 民族問題五種叢 書編輯委員会編 (1981)
	黔東方言	貴州省(黔東南・黔西)、広西壮 族自治区(桂北)	ムー	
	川黔滇方言	四川省南部、貴州省(黔西・黔中)、 雲南省、広西壮族自治区(桂西)	モン	

出所：村松一弥(1973)『中国の少数民族——その歴史と文化および現況——』毎日新聞社、205-209頁。国家民族委員会民族問題五種叢書編輯委員会編(1981)『中国少数民族』人民出版社、446頁。

伝統的な経済生活の基盤とも称すべき生業形態に注目して区分することも可能である。すなわち、ミャオ族の集落は、周辺に分布・居住するシユイ族・トン族・ヤオ族などの集落と同様に、形態としては家屋が一ヶ所に集中するという集村形態をとる。しかも、その戸数が平均すれば一〇〇戸から一五〇戸前後のものが多く、かような外見上の特色がみられるミャオ族の集落であるが、その形成に関しては二通りのタイプが存在する。

第一のタイプは、河谷や「壩子」^⑩を中心し、主として河川水を利用した水田稲作に従事する集団によって形成されたものである。第二のタイプは、主として山腹斜面やあるいは山頂近くにまで達する棚田・段々畑、または集落周辺の山中に散在する焼畑において、陸稲をはじめ、トウモロコシやアワ・ヒエなどの雑穀、タロイモなどのイモ類を、栽培している集団である。前者は、海拔高度五〇〇〜七〇〇メートルの比較的低所に生活空間の基盤をおいているのに対し、後者は、大部分が八〇〇〜一〇〇メ

ートのより高所に定住している。それ故、同じミャオ族に所属している集団であっても、主として生活空間の海拔高度が異なるため、生業形態に代表される生活様式 (style of life) も微妙に違っている。

かかる理由によって、前述の第一のタイプの集団が、海拔高度の比較的低い河谷や「壩子」などの小規模な平坦地を主要な生活空間の基盤にしていることから「平地ミャオ」族、第二のタイプの集団が、山腹斜面や山頂部周辺を主たる生活空間の基盤にしているので、「高坡ミャオ」族と現地などでは称されることが多い。

なお、ミャオ族の女性が着用している民族衣裳に関しては、右述の二区分が該当する。すなわち、「平地ミャオ」族の場合、足もとにまで達する丈の長いブリーツスカートをはいているのに対し、「高坡ミャオ」族は、丈の短いブリーツスカートを着用している。そのため、外見上からも両集団の識別は大変容易である。かように、両集団の女性が常用しているスカートが著しく異なる形式を採用しているのは、「高坡ミャオ」族の場合、伝統的に山腹斜面などでの山仕事が主体であるため、丈の長いスカートでは歩きにくいうえに作業を実施するのが困難であるといわれている。さらに、両集団間では、通婚がほとんど認められない他、以前では、「平地ミャオ」族が「高坡ミャオ」を蔑んだり、小作に就いて支配していたという。



揀東村では現在も民族衣裳は自給自足

本稿の調査対象である黎平県口江郷揀東村に居住するミャオ族は、第1表の区分でいえば海拔高度は高くないが黔东南方言に所属する、「高坡ミャオ」族である。ただし、「高坡ミャオ」族であるが、揀東村に集落を形成してから比較的長い年月を経過している。それ故、本来の「高坡ミャオ」族の特色とされる、伝統的な生業と看做されている焼畑農業や狩猟は実施されることが少なく、山腹斜面などを開墾し、棚田や段々畑を造成し、天水利用による陸稲・水稻の稲作および畑作に従事するものが多い。

なお、現在では、ミャオ族研究は、民族衣裳の色彩を主

とした便宜的な分類方法に基づく研究から、方言を中心とした研究や、筆者らが実施している原初的な生業形態をメルクマールとした研究へと大きな転換期をむかえていると考えられる。しかしながら、中国においては、ミャオ族の社会全体を分析視野に入れた研究業績は意外と少ない。かかる点は、中国国内におけるミャオ族研究者が非常に限られていることと、大いに関係があると思われる。すなわち、数少ない中国人研究者でも、その多くが、ミャオ族出身に限定される。これらの研究者たちは、自身の故郷の研究に専念し、他地域のミャオ族社会に関してはほとんど調査・研究を実施していないからである。

一方、外国人研究者によるミャオ族研究に関しては、どのような状況であろうか。周知のように、一九四九年に中華人民共和国が成立し、社会主義国家体制が採用された。そのため、外国人研究者は勿論のこと、一般の観光客でも自由に国内を調査したり、参観することができなくなってしまった。いわゆる対外「未開放地区」が設定されたのである。雲貴高原を中心とするミャオ族居住地区に關しても状況はまったく同一である。すなわち、一部の観光目的のために特別に参加を許可された集落を除いては、対外「未開放地区」に指定されている。それ故、現在においてもフィールドサーヴェイを実施することが大変困難である。

しかしながら、近年において中国の近代化が急速に進展

していく中で、対外「未開放地区」も減少傾向がみられる。雲貴高原に關しても、ほとんどの県が対外開放された。ただし、対外開放されたといっても、実際に現地を訪問してみると、県人民政府が設置されている県城、および若干の大規模な地方都市や鎮などと称される地方中心集落に開放が限定されている場合がほとんどで、ミャオ族などが居住する集落については、県城周辺の交通の便の良好な一部を除いて、調査は勿論のこと、参観することすらできないという状態がなお続いている。とはいっても、中央および地方の研究機関などの協力が得られれば、徐々にではあるが少数民族居住地区内でのフィールドサーヴェイを実施することも可能となってきた。そして、かようなフィールドサーヴェイに基礎をおいた報告書・著作が刊行されるようになった。ミャオ族研究に代表される中国における少数民族に關する調査・研究は、その端緒が開かれたばかりであるといえよう。

とりわけ、ミャオ族の場合、他の少数民族以上に、わが国の研究者がとくに強い関心を有していたという特徴が存在する。すなわち、かかる理由を補足すれば、日本の伝統文化の形成に關する基盤あるいは根底となったと看做されている基層文化(Basic Culture)の源流の有力地域の一つにこれらの民族集団が居住しているとするものである。つまり、ミャオ族に代表される雲貴高原に分布・居住する山

棲みの民族集団に関する詳細な文化や経済に関する現状分析を通して、日本文化の基層を探るうとするものである。^②

本稿も、基本的には、右述したかかる立場を踏襲するが、研究視角としては、度々他の拙論などでも論を展開してきたように、文化地理学的手法を用いて分析していこうとするものである。すなわち、筆者の唱える文化地理学的手法とは、西南中国を代表とする高原である雲貴高原という自然環境によつて規定された空間において生計を立てているミャオ族の一集落を事例としてとりあげ、主として、住民の生活の経済的基盤となつている生業形態に注目し、それに、論点をしぼり、フィールドサーヴェイで入手した資料を中心に具体的に検討していこうとするものである。

二 村の概況

調査対象揀東村が所属している口江郷は、黎平県の行政中心である黎平（徳鳳鎮）の西南三〇公里（三〇キロメートル）に位置している。口江郷は九行政府から構成される（第2表）。郷の住民は全員が少数民族ではなく、第2表に示したように、漢民族も居住している。しかし、住民にとつては基本的な生活空間の中心となつている、村の下部（部）行政単位である寨には、漢民族と少数民族、あるいはトン族とミャオ族というように、民族間の雑居はまった

く認められない。

口江郷の戸数は一五六〇戸（一九九五年統計）、人口は八一八〇人である。また、郷内において、海拔高度がもつとも高い地点に位置している集落は、藍扒村岑明寨の九二〇メートルで、トン族が居住している。逆に、もつとも低い地点にある集落は、郷人民政府が設置されている口江村口江寨の高度三〇〇メートルであり、ここにもトン族が居住している。なお、口江村までは、県城から一日に数回定期路線バスが運行されている。

揀東村は、第3表にみられるように四寨から構成されている。それぞれの集落別の戸数・人口などの項目に関して

第2表 口江郷の村落構成

村名	寨の数	備考
口江村	2	侗 侗
岑阡村	4	苗 苗 侗 苗 漢
揀東村	4	苗 苗 苗 苗 漢
双溪村	3	苗 苗 苗 苗 漢
嶺勝村	3	苗 苗 苗 苗 漢
得腦村	5	苗 苗 苗 苗 苗 侗
銀朝村	1	侗
曹坪江村	5	苗 侗 侗 侗 侗
藍扒村	5	苗 侗 侗 侗 侗

注：侗はトン族の集落、苗はミャオ族の集落、漢は漢民族の集落。
出所：現地での聞き取りより作成。

整理したものが第3表である。村の成立は、村内には文献史料が残っていないため、正確には不明である。しかし、古老たちの話を総合すると次のようになる。

すなわち、揀東村に居住するミャオ族の中で、もつとも多くの人口を占める呉姓に関しては、元々祖先は長江支流贛江上流吉安（江西省）に居住していた。そこから、湖南省を経由して山伝いに西進し、貴州省に移動してきた。貴州省では、最初に黔东南苗族侗族自治州天柱県遠口に定着した。遠口には、呉家の祖先を祭る祠堂があるという。そこから黎平県茅貢、岩洞を経由して、当地に定住するようになった。呉姓の祖先たちは、同様のコースを通って、数回にわたり当地に移動してきたようであり、古いもので当地に定着してから二〇代余（約五〇〇年）、あるいは一二代（約三〇〇年）経過しているという。ミャオ族の他姓の祖先も、ほぼ同様のコースで移動してきたとされる。一方、当地域に居住する漢民族に関してはミャオ族とは異なり、振剛寨で最多を占める張姓の祖先は明代洪武年間（一三六八―一三九八）の一三八〇年に河北省から黎平県県城に移り、清朝乾隆年間（一七三六―一七九五）に揀東村に移動してきたという伝承をもっている。当地に定着してから一八代を数えるという。

なお、その他の姓の祖先、例えば、顧姓の場合は、以前のことは不明であるが、先住地は黎平県に南接する從江県

第3表 揀東村の概況(1995年)

寨名	戸数(戸)	人口(人)	海拔高度(m)	水田(畝) ⁽¹⁾	畑地(畝)	山林(畝)	住民の姓
上揀東	42	210	550	220	35	700	呉・滾
下揀東	43	250	550	210	40	600	呉
振剛 ⁽²⁾	32	155	680	137	40	700	張・顧・王・何・鄭・石
平峇	40	220	500	138	40	500	呉・楊

注：(1) 住民はすべて漢民族、他の集落はすべてミャオ族。

(2) 1畝は6.67アール。

出所：揀東村での聞き取りより作成。

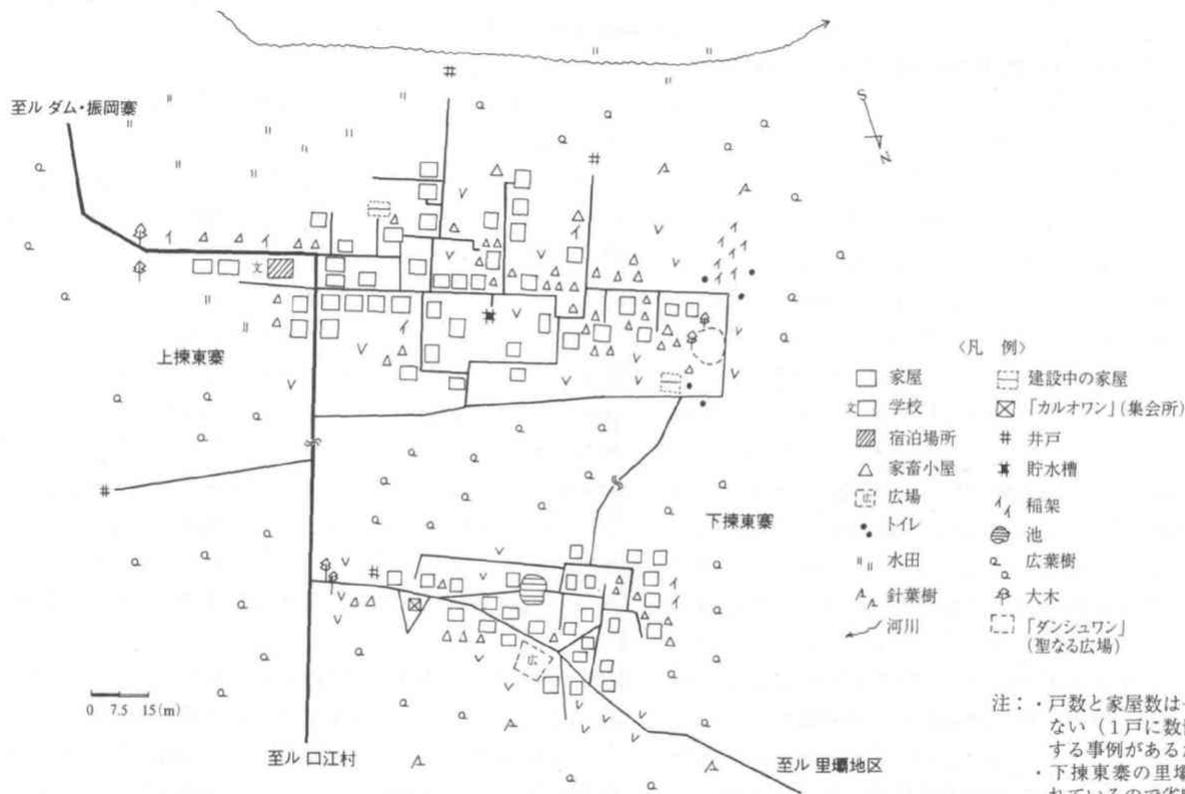
谷洞郷より当地に移住してきたという。また、王姓の祖先は、北西に隣接する城関から商売（行商）のために移ってきたというように、各姓ごとに、それぞれの先住地先が異なっている。このように、他地域から漢民族の集団があえて山間部に位置する当地に定着したのは、耕地が多く存在したことや、製炭用の原木が豊富であったからであるという。

フィールドサーヴェイに選定したのは、揀東村のうち、上揀東寨と下揀東寨である。かかる理由は、両寨ともミャオ族が居住する典型的な集落であること、揀東村のミャオ族は、最初に上揀東寨に定着し、その後人口増加の理由などから一部が下揀東寨に新しく集落を建設したと考えられるからである。最初に、両寨の概略を示した第2図を参照しながら、両集落の特徴を検討していくことにする。

□江郷の中心□江村から揀東村の中心的位置を占めている上揀東寨までは約五公里である。以前から使用されていた□江村からの道路は狭く、馬車が通行するのにも苦労したほどの悪路であった。しかし、一九九五年二月に、上揀東寨の先に位置する双江郷蓋堂までの新道が開通した。この新道の建設にあたっては、黔东南苗族侗族自治州、黎平県、□江郷などの人民政府が出資し、上揀東村などの住民が労働力を提供した。未舗装であるが道幅が拡大された新道が開通したことによって、周辺の山地から伐採された木



ダムから水を引く貯水槽



第2図 調査地域の概略図(部分)

出所：現地調査より作成。

材を運搬することが大変容易となった。このように、新道は、木材の運搬に使用される林道としての性格が強かったが、住民が背負ったり、馬車に積んで運搬していた振剛寨の特産物である製炭も、トラクターなどの小型車輛やトラックなどで運搬可能となった。将来においては、この新道の開通により、村内経済の活性化することも考えられる。

電気は一九七六年に送電が開始された。しかし、この電力は近くを流れている小河川で発電したものを利用していた。そのため、発電量が小さいことや、十数年前に上流に農業用水用のダムを建設したことによって、河川の水量が減少し、停電しがちになった。そこで、一九九五年八月より、東隣の双江郷の発電所から電力の供給を受けている。その送電に関しては、上揀東・下揀東の両寨の住民より一人当たり一〇元ずつ均等負担した。

既に指摘したように、上揀東および下揀東の両寨は、現在ではまったく別の集落となっている。しかしながら、住民の生活にとって必需である飲料水を供給する井戸に関しては、小規模なものは両寨にそれぞれ存在するが、最大の規模の井戸（「ワイタントン」と呼ばれる）は、両集落のちようど中間の地点に存在し、通常両集落の住民が共同して利用している。かかる意味からも、両寨は、元来一つの集落であった、と推察できる。かように、両寨には井戸が

存在するが、これらの井戸は「ワイタントン」を含めて、水量が多いとはいえない。そこで、上揀東村では、上述のダムから一九八二年に飲料水を摂取し、集落のほぼ中央の貯水槽にためて利用している。

また、上揀東寨と下揀東寨の間は小高い丘陵となっている。その頂上付近に円形をした広場（「ダンシユワン」、「草坪上」）が存在する。「ダンシユワン」は、日常的には洗濯物を干したり、藍染めした布を乾燥させたりする場所となっている。しかし、「ダンシユワン」は、元来五年ごとに開催される年越しのときに行なわれる歌や蘆笙舞い（「ツオクター」「踩歌堂」）の会場となる「聖なる空間」である。「ダンシユワン」では、「ツオクター」の他、三年に一度は水牛を闘わせる闘牛も実施される。

第2図を参照すると、集落内に家畜小屋が非常に多いことに気づく。このように、両集落とも家畜小屋が目立つのは、両集落の家屋形態と関連している。すなわち、他の地域のミャオ族の場合、家屋は、木造二階建ての高床式住居で、その一階部分が家畜小屋にあてられているため、外見上は家畜小屋が判別しにくい。それに対して、両集落のミャオ族の家屋は、漢民族の農村部で卓越する平屋の土間形式である。それ故、戸外に家畜小屋を設置しているのである。両集落とも、ほとんどの家屋が家畜小屋を所有し、牛・豚などの家畜および鶏・アヒルなどの家禽を飼育してい

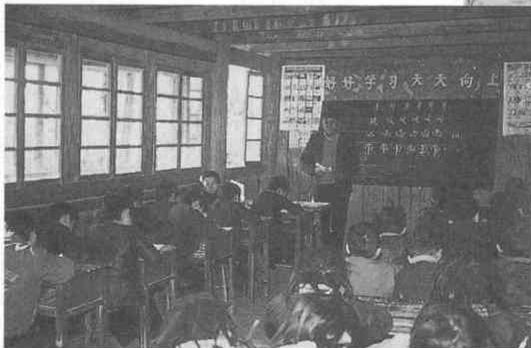
る。その方法は、定期市などで子牛や子豚を購入し、飼育するといふもので、成長すると牛の場合役牛として使用されることもあるが、定期市あるいは集落にやって来る仲介人に売却する。すなわち、現在では、この家畜飼育が住民の最大の現金収入となっている。

その他、眼にとまるのは、トイレが非常に少ないことである。ミャオ族は、本来トイレを設置する習慣をまったくもたなかった。これに対して、ほぼ同地域に居住するトン族の場合、各戸がそれぞれ戸外にトイレを設置している。

そのため、集落内にトイレが設置されていれば、トン族の集落であると外見からも容易に判明する。このようなトン族の慣行の影響を受けたためか、上棟東寨の一部にはトイレが存在する。なお、下棟東寨には、「カルオワン」と称する集会場が存在する。住民の会議が重要な事件などが発生すれば、この「カルオワン」で行なわれるという。上棟東寨には、「カルオワン」は存在しない。小学校が「カルオワン」の代わりに使用できるからであるという。

学校は、上棟東寨・振剛寨・平吝寨の三ヶ所に設置されている。しかし、振剛寨および平吝寨の小学校は、教員が各々一名で「民辦教師」である。そのため、第一学年と第二学年のみの教育を行なっている。上棟東寨には、両小学校を統轄する校長がおり、他の二名の「民辦教師」と共に、第六学年までの生徒を教えている(第4表)。第3表で特徴

毎週月曜日の朝に国旗を掲げる棟東小学校▶



◀「公辦」教師(漢族)の授業風景

第4表 「上棟東小学」の生徒数(1995年)

学年	生徒数(人)
1	27
2	10
3	13
4	13
5	11
6	7

出所：「上棟東小学」での聞き取りより作成。

語文(国語)・数学・思想品德・自然、さらに高学年になると中国歴史・地理情況が教えられる。「棟東小学」を卒業すると、一部の者

的なことは、第一学年の生徒数が他の学年に比べると非常に多いことである。かかる点は、政府が「国家義務教育法」に基づいて、七歳以上の児童は男女とも全員小学校に入学しなければならぬ、という「入学通知書」を出したためであり、その通達によって従来あまり通学しなかった女子も入学することになったからである。第一学年二七名のうち、一三名が女子である。

棟東村では、人民共和国成立後の一九五〇年に学校教育が開始された。しかし当時は、校舎などの建物がなく、一般の民家あるいは倉庫などを借りて、そこで授業が行なわれていた。現在の上棟東寨にある「棟東小学」は、一九七二年に建設されたものである。「棟東小学」では、第一学年の授業は、ミャオ語と中国語(漢語)の両方を用いて行なっている。学費は、一学期(年二学期制)で十数元、その他教科書代も必要

はわが国の中学校に相当する「岩洞初級中学」に進学するか、黎平にある「黎平民族第一中学」に進む。後者には、ミャオ族のための二つの「民族班」(学級)が設けられており、無償で民族教育を主体とした教育を行なっている。なお、「岩洞初級中学」では、寄宿舎代は免除されるが、食事代・学費などは有償で、一学期に六〇〜一〇〇元ほど必要である。これら中学校のテキストはすべて中国語で書かれており、「岩洞初級中学」では英語の授業もある。初級中学校を卒業すれば、中等師範学校・中等専門学校などに進学することが多い。ミャオ族など少数民族がこれらの上級学校に進学するとき、成績などに関しては優先的に考慮される。

「棟東小学」の校長の談によれば、棟東村での教育上の困難な問題として、

① 生活の貧困

② 当村における「重男軽女」(男尊女卑)の思想により、多くの家庭では女子に修学の機会を与えない。

の二点があげられる。しかし、勉学させるには金銭が必要なのは確かではあるが、経済的にまったく負担できない額ではなく、問題は②の思想の遅れが原因であるという。黎平県では、他の近隣の諸県と同様に、一九九二年より、新たに「教育税」を従来の税金とは別に全戸から徴収しており、それによって校舎などの建設、机・椅子などの備品

第5表 揀東村の幹部

役職	姓(年齢・男女別)	出身地	民族名
村長	呉(43・男)	同村上揀東寨	ミャオ族
共産党支部書記	張(43・男)	同村振剛寨	漢民族
副村長	呉(43・男)	同村下揀東寨	ミャオ族
民兵連長	呉(23・男)	同村上揀東寨	ミャオ族
副村長兼会計	張(40・男)	同村振剛寨	漢民族
経済委员会主任	呉(52・男)	同村平吝寨	ミャオ族
婦女主任	羅(40・女)	広西壮族自治区梅寨	トン族

出所：揀東村での聞き取りより作成。

を整えている。しかしながら、この「教育税」は、住民にとつては重い負担になつていようである。

なお、ミャオ族の他の集落では、集落の出入口に門を設け夜になると閉じるといふ習慣が残つていることがあるが、上揀東・下揀東の両集落とも、かかる門は、存在しない。ただ、第2図にみられるように、下揀東寨の入口に該当する場所に、大きな樹木が繁つており、そこが集落の入口であることを示している。

以上、調査対象集

落である上揀東寨および下揀東寨の両集落の概略図を参照しながら、外見上とくに眼についた特色を列挙してきた。かような特色を有する両集落の住民に対して、行政上あるいは治安上などの責任を担っているのが、村長以下の村の幹部である。村の幹部は、第5表にみられるように七名から構成されているが、各寨からはほぼ均等に選出されているという特色がみられる。そのうち、村長は村民全員の中から、共産党支部書記は村内の共産党員の中から、それぞれ選挙によつて選出される。その他の副村長以下は、村長および共産党支部書記の推薦などによつて任命される。



イロリの残る室内

三 生業形態の特色

棟東村のミヤオ族は、当地に定着してから比較的長い年月が経過している。それ故、集落周辺を主体に山地を開墾し、水田や畑地を造成してきた。そのため、なお一部では「高坡ミヤオ」族の伝統的な生業形態である焼畑農業を實施しているが、国家が焼畑を厳禁していることもあり、かかる形態の農業はあまりみられない。以下では、上棟東寨および下棟東寨の両集落を事例として、現況を具体的に分析していくことにする。最初に、その前提として、近年における土地制度の変遷を検討しておく。

棟東村では、中華人民共和国成立直後の一九五一年より、土地改革が実施された。調査対象である上棟東および下棟東の両集落についても、翌年の一九五二年から土地改革が着手された。その土地改革によって、それまで存在した地主対一般農民・小作人という階級的な対立が消滅した。つまり、伝統的に存在した地主階級あるいは富農階級・中農階級などといった農民の階級的な区分が廃止されたのであった。

両集落の古老数人から聞いた土地改革以前の状況を示すと第6表のようになる。第6表より判明するように、上棟東寨および下棟東寨とも、大規模土地所有者である地主階

級、比較的多くの耕地を所有し経済的に安定している富農階級、耕地や山林をまったく所有せず地主などの小作人となっている雇農階級の三階級に分類された農民は存在しなかった。それ故、両集落には、表面的に特別に裕福な者や貧困な者も存在しなかったような印象を受ける。

しかしながら、当時両集落の大半を占めた貧農階級に区分される農民は、年間に主食である穀物が冬季を中心に一カ月から数カ月間不足するという状態であった。そのため、集落周辺の山腹斜面を焼き、その後にはアワやトウモロコシを栽培したり、³⁵⁾山地に成育するワラビの根を掘り起こし、それを砕いてデンプンを採用し、餅にして食べたりしていた。また、近くのトン族などの集落に出稼ぎに出ること

第6表 土地改革直前の生活状態

寨名	地主(人)	富農(人)	中農 ⁽¹⁾ (人)	貧農 ⁽²⁾ (人)	雇農(人)	総戸数(戸)	総人口(人)
上棟東	0	0	8	22	0	30	170~180
下棟東	0	0	4	21	0	25	120~130

注：(1) 自給可能。(2) 年間1~数カ月分食糧不足。
出所：現地での聞き取りより作成。

も多かった。出稼ぎ先は、同郷の口江村・岑阡村および岩洞郷などであり、主として田植え・刈り入れなど農作業の手伝いをした。日当は、食事付で四斤（一斤は五百グラム）の粃をもらった。かような農業出稼ぎは、貧農階級の農民にとどまらず、中農階級の農民も実施した。

さらに、隣接する從江県鼎城從江（丙梅鎮）を流れる都柳江を利用して伐採した木材を流す筏流しの作業も、両寨の住民にとっては現金収入を期待できる非常に割のよい出稼ぎであった。筏流しの作業は個人が単独で実証するのではなく、村内の若者十数名が集団を形成して職務にあたった。筏流しの元締め（経営者）は、広西壮族自治区三江侗族自治県富禄の漢民族であった。この元締めの依頼に応じて、伐採された木材を、冬季（農曆一〇〜十二月、以下暦はすべて農曆）および夏季（六〜八月）に村内を流れている都柳江上流口江河から、本流の都柳江沿いに富禄まで流した。富禄までは、雨量の少ない冬季では三〇日間、多い夏季では二〇日間ほどかかった。作業が終了すると日当がまとめて支給された。日当は食事付で、二銅毫か一銅毫であった。当時は、一銅毫で塩を一〜二斤購入することができた。

土地改革以前においては、水田にはモチ種の米のみが栽培されていた。モチ種の米の収穫には、鎌ではなく現地地「ウーム」と称されている半円形をした穂摘み具が用いら

れ、根刈りではなく穂刈りされた。現在でも、モチ種の米は、このように穂刈りして収穫されている。また、秋の収穫後、現在のように裏作としてナタネ・大根などを植え、そのまま休閑としたが、一部の水田には水を張りコイ（鯉魚）などの養殖も行なっていた。定着後による生活で、狩猟などの機会が少なくなり、動物性タンパク源の補給を目的としたためと考えられる。

畑地には、綿花・サツマイモ・アワ・コウリヤンなどを主として栽培していた。そのなかでも、とくに多量に栽培していたのが綿花とサツマイモであった。理由としては、前者の場合、衣服の布地の材料として、後者は主食である飯米を補完するために、必要とされたためであった。なお、土地改革以前、税金として、収穫高に応じて米を上納する以外に、一つの囲炉裏に対して一カ月三銅毫、同様に人頭税として一人にたいして一〇銅毫を納入していた。

揀東村では、一九五八年に人民公社が成立した。人民公社になると耕地はすべて集団化された。その後、一九八〇年に人民公社が解体され、生産責任制が導入された。それを受けて、揀東村でも集団化されていた耕地および山林を住民に分配することにした。水田は、男女に関係なく、それぞれの家族の人数に均等に分配した。しかし、老人や子供に対しては、成人男女よりも少なく分配された。すなわち、成人の男性の一人分は、三〇把の粃が収穫できる水田であ

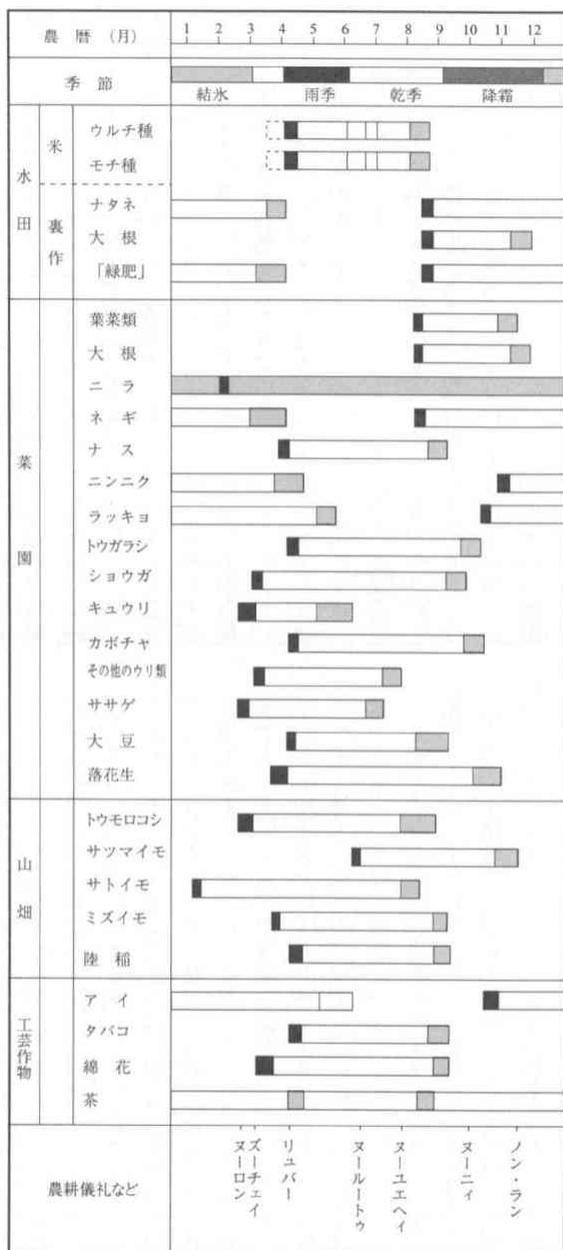
① 同様。同様に山林に関しても家族数に応じて分配されたようであるが、分配方法などが多少複雑で、詳細に関しては把握できなかった。現在の棟東村の土地利用を示したのが前出の第3表である。

第3図は、上棟東寨および下棟東寨の両集落の農業カレンダーと農耕儀礼を示したものである。第3図を参照して、経済活動の中心となっている農業について、具体的に検討していこう。両集落の農業を左右する自然条件としては、気候と降水量が重要なものといえる。すなわち、前者の氣候に関しては、両集落が比較的海抜高度の高い地点に位置しているという地理的条件のために、北緯二六度付近という低緯度にもかかわらず、夏季を除いて高度にはならない。後者の降水量に関しては、降水量が少ない乾季（三月および六～八月の二回）と雨天が多い雨季（四～五月）とが明確に分かれている。また、秋季になると霜が降りることが多くなり、冬季には積雪がないものの、結氷する。それ故、農作業もかかる自然条件に適應する形式で実施されている。

すなわち、農業の中心は、年中栽培可能なニラ、水田の裏作として栽培されるナタネ・大根など一部の作物を除き、夏作物が主体となる。第3表に示したように、両集落の耕地の多くは水田である。水田の中心は米作であるが、前述したように、両集落を含む棟東村では周辺のミャオ族

居住地区と同様に、伝統的にはモチ種の米が栽培されてきた。土地改革以前にもウルチ種の米が栽培されていたが非常に少なかった。人民公社の時代に、政府の指導でウルチ種の米を栽培することが奨励された。理由は、ウルチ種がモチ種よりも二倍以上の収穫量をあげることができるからである。現在では、多くの農家では、ウルチ種の米の栽培が九〇%ほどに達している。かように、現在ではウルチ米の栽培が米作の中心となっている。しかし、住民たちの話を総合すると、やはりモチ種の米の方が腹もちが良い、美味であるなどの点から好まれ、「ハレ」の日には餅がつかれることが多い。ただし、前述したように、政府の強力な指導もあり、また収穫量の差が大きいことなどを考えると、ウルチ種の米の栽培が中心とならざるを得ないとのことである。

夏作物の播種および田植えに関しては、第3図からも判明するように、ウルチ種・モチ種の両方の米やトウモロコシなどの雑穀、ナス・トマト・トウガラシなど主要な野菜類が典型的なのであるが、冬季の結氷が緩み出す三月から雨季がはじまる四月初旬にかけて、一斉に開始される。主食となる米の場合、ウルチ種およびモチ種とも水田の一部を使って行なわれる苗代での播種、田植え、除草、収穫という一連の農作業は、ほぼ同時期に実施される。かかる点は、周辺地域での集落では、一般にモチ種の米の栽培の方



第3図 農業カレンダーおよび農耕儀礼
出所：現地での聞き取りより作成。

が、播種および田植えの期間がウルチ種の米の場合よりも若干早く、しかも収穫までの成長期間が長い。上棟東寨および下棟東寨においては、現在、モチ種の米の栽培が極端に減少している。そのため、本来であれば、他集落で実施されているように、モチ種の米の栽培に関しては、播種、田植えを早く行ない、成長期間を充分にとつた方が高収量が期待できることが予想される。しかし、農作業の期間が長くなるなど作業が煩雑になるためか、モチ種の米の栽培をウルチ種の米の栽培に合わせている。

水田での播種、田植え、収穫など主要な農作業は、従来通り人力が農業の中心である。しかし、除草に関しては、手で雑草を除去するのではなく、十年ほど前から農業を背中に背負った散布器から直接散布するようになってきた。とくに、ウルチ種の米は高収量が期待できるのであるが、雑草や害虫に弱いからである。かように農薬が使用されるはじめて以来、小河川でのドジョウ・エビなどの川魚の漁獲が著しく減少したり、水田での魚の養殖にも支障をきたし、問題となっている。これらの小河川で捕獲した魚や水田で養殖した魚は、住民にとって貴重な動物性タンパク源の供給源の一つとなっており、一部は「腌魚」として保存され「ハレ」の日などの御馳走として供される。すなわち、「ハレ」の日の食事は、モチ米の強飯と「腌魚」が中心になることが多いのである。なお、両集落の水田の特色は、山腹

斜面に造成された天水利用の棚田が主体で、一筆ごとの面積が大変小規模なことである。それ故、個々の農業においても、それぞれの水田の筆数は具体的には後述するが、多くのものでは五〇筆にも分散している。そのため、農作業を行なうには非常に不便を感じているようである。しかしながら、わが国においてかつて一部の地域などでは盛んに行なわれていたような、耕地の割替えあるいは交換合などは実施されていない。また、水田の一部には、裏作としてナタネをほとんどの農家では栽培している。ナタネは種子から食用油を採取するためである。しかし、両集落にはナタネの種子を絞る搾油機がないため、口江村に持参し、絞ってもらったり、種子を売却している。

上棟東寨および下棟東寨の両集落の畑地としては、二種類存在する。すなわち、第一のものは、集落周辺に小規模に点散する畑地で、白菜・青菜などの葉菜類、大根、ニラ、ネギ、キュウリ、カボチャおよび各種の豆類など野菜が中心に栽培されている。この畑地で栽培される作物は量的にも大変少ないこともあり、すべて自家消費に供される。かかる畑地は、人民公社時代の自留地を継承したものと推察でき、両集落とも全戸が所有している。

これに対して、第二のものは、集落周辺の山地（現地では「山林地」と呼んでいる）の一部分を、各戸が個別に開墾して開いた急斜面の耕地で、段々畑などにもなっている

ものもある、いわゆる山畑である。ここでは、第一のタイブの耕地とは異なり、多少面積が広いことなどから主食である飯米を補完する目的で、サツマイモ・サトイモなどのイモ類、量的には少ないがトウモロコシ、現在ではほとんど栽培がみられないが焼畑においては主要な作物であったと推定できる陸稲、さらには住民たちの数少ない嗜好品となつているタバコが栽培されている。それ故、このタイプの耕地面積は、各家の家族数の食糧状況などによつて相当の開きがあるように思われる。

なお、畑地で栽培されている作物の中でも、とくに注目されるのは、トウガラシ・ショウガ・ニンニクなどの調味料の原料となる作物がほぼ全戸で栽培されていることである。理由は、両集落が大陸内部に位置し、岩塩も産出しな^④いことなどから、調味料としての食塩を補う目的があると推定できる。かように、異なるタイプの畑地が存在するが、畑地全体を概観すると、野菜類、豆類、イモ類などと栽培されている作物の種類が非常に豊富である。かかる点は、両集落の農業が自給自足が主体であるためと推察できる。

四 農耕儀礼の特色

農耕儀礼は、農耕や農業に付随した儀礼である^⑤。具体的には、それらの生産物に応じ、その開始から終了に至るま

での節目に営まれる祭事であるといえる^⑥。かかる意味での農耕儀礼には、大きく分けて稲作儀礼と畑作儀礼とが認められる。対象集落である上棟東寨および下棟東寨の両集落を含むミャオ族社会においては、すべてが米作に関する前者の稲作儀礼のみである。かかる理由は、ミャオ族にとつて米作がもっとも重要な農作物であるためと推察される。

しかしながら、伝統的にはミャオ族の中でも「高坡ミャオ」族は、焼畑農業や狩猟を生業の中心としており、一部ではその焼畑に陸稲を栽培したが、陸稲は雲貴高原東部では主要な焼畑農作物ではなかつた。また、定着後では山腹斜面に造成された天水利用の棚田や河川水を使用した「壩子」においては、水田稲作に従事することが多くなつてきた。しかし、これらの水田稲作に関する技術は、本来「高坡ミャオ」族の場合、知らなかつたかもししくは高度なものもつていなかつたと考えられる。そのため、彼らは、定着先の周辺に居住する少数民族の中で、とくに水田稲作に関する高度な技術を所有していたトン族や漢民族の技法を習得していった^⑦。それ故、農耕儀礼に関しても、ミャオ族独自といえるものがほとんどなく、多くはトン族や漢民族の農耕儀礼と類似したものを行なつているか、それらを簡素化したものとなつている。

ミャオ族の年中行事で伝統的に最大の祭事と看做されて

きたのは、秋の収穫後に実施される「ノン・ラン」(「苗年」と呼ばれているミャオ族独自の正月である。しかしながら、他地域に居住するミャオ族の集落とは異なり、上揀東寨および下揀東寨の両集落では、「ノン・ラン」を実施することとはするが、正月の行事としては漢民族の正月である「春節」(当地では「ヌーロン」と称している)の方が大規模な行事となっている。「ヌーロン」では、前述したように、五年ごとに「ゾオク」が実施され、また三年に一度は二頭の水牛を闘わせる闘牛も行なわれる。

農耕儀礼としては、「ノン・ラン」よりも重要な祭事は、正月一五日に実施される「ズーチエイ」あるいは「ジツイロン」(「元宵節」)である。当日は、「ヌーロン」同様、餅をつき御馳走を食べ、さらに空砲を撃つたりして楽しい一日を過ごすし、今年度の農作物の豊饒を祈願するのである。この行事が終了すると、新しい年度の農作業が開始となる。

田植えは毎年四月に実施する。その直前の「ウサギ」の日に「リュバー」を行なう。この行事は、漢民族の間では一般に「開秧門」と称されている、いわゆる「水口祭り」に該当する祭事である。当日、各家では、それぞれの所有している水田のうち、適当な水田を一筆選び、主人が一人でそこに出かける。そして、水田の一角に小規模な祭壇を設けて、供物、酒などを供え、稲の豊作を祈願する。この

儀礼が終了すると、一斉に田植えが開始される。

かくして、田植えが無事終わる一段落つくと、「ヌールトウ」(「粽粿節」)が挙行される。当日は、チマキを食べたり、アヒルをつぶしたりして御馳走をつくり、友人や親戚の家など訪問し合い、楽しく休日過ごす。上揀東寨および下揀東寨ではこの行事を六月六日に実施している。しかし、本来、「ヌールトウ」は漢民族の儀礼であり、わが国でいう「端午の節句」に相当する祭事である。それ故、虫送りの行事が主体である六月六日の儀礼(「六月六」とはまったく異なるのであるが、両集落では実施する季節が近い)のためか、二つの祭事を同時に行なっている。そのような関係から、「ヌールトウ」を行なう目的は何であるかを知っているものがないという状態で、現在では、右述したように単にチマキなどを食べて身体を休息させる日となっている。

その後、除草という非常に重労働の作業が終了し、初穂が出る季節になると、「ヌーユエヘイ」(「喫新節」)が行なわれる。この祭事は、一種の初穂祭りであり、初穂を神や祖先に捧げるといふ儀礼である。しかし現在では、かかる行事を熱心に行っている家は少なく、当日は「ヌールトウ」同様、御馳走を食べて休息する日となっている。

以上が現在、上揀東寨および下揀東寨の両集落で実施されている農耕儀礼の全貌である。両集落の農耕儀礼の特色

は、漢民族やトン族などと比較・検討すると、例えば、収穫後に実施される収穫祭が存在しないなど、その回数が少ない点が指摘できる。さらに、前述の「ヌーニイ」にみられたように、住民の大半は、その儀礼が実施される真の目的を知らず、単に休日としての認識しかない事例も存在する。かように、農耕儀礼に関して住民の関心が薄いように見えるのは、既述した如く当地域でみられる農耕儀礼は、基本的には、水田稲作に付随したものである。それ故、伝統的に、水田稲作を生業の中心としてこなかった両集落のミャオ族を筆頭に、「高坡ミャオ」族にとつては、あくまでも漢民族やトン族などの異民族集団からの影響によつて実施するようになったからである、と推定できる。

この他、農耕儀礼と直接深く関係していないが、両集落のミャオ族にとつては最大の祭事とでも称すべき儀礼が存在する。かかる行事は、「ヌーニイ」(喫鼓臈)と称される一種の祖先祭と看做されているものである。この祭事は、ミャオ族にとつては欠くことのできない儀礼なのであるが、犠牲獣として水牛などの牛を多数一度に屠り、神に捧げるという儀式が伴う。そのため、人民共和国成立後、あまりにも残酷で野蛮であるなどの理由から全面的に禁止されてきた。しかしながら、両集落の住民の強い要望もあり、また、ミャオ族の団結を図るという目的も存在するため、棟東村では、生産責任制が導入された一九八〇年以降再び

実施されることになった。当集落の「ヌーニイ」の目的は、祖先に対する祭祀活動であるとされるが、この「ヌーニイ」を取り仕切る特定の組織は存在しない。最初の日は、供儀として屠った牛は各戸で食卓に供し、翌日は近くの親戚や友人を招いて祝宴を催す。

「ヌーニイ」は、他のミャオ族の集落では一三年あるいは七年ごとに開催されるという事例が多いが、棟東村では人民共和国成立以前から五年ごとに実施している。この間隔が短いということは、棟東村のミャオ族の経済的な豊かさ(相対的ではあるが)を示すメルクマールといえるかも知れない。上棟東寨と下棟東寨の両集落では、同じ日にこの祭事を共同で行なっている。最近では、一九九一年九月に実施した。「ヌーニイ」は次のように実施された。

「ヌーニイ」のときの犠牲獣は水牛が使用されるのが一般的である。しかし、両集落の「ヌーニイ」に関しては、海拔高度などの関係から水牛を飼育することが難しかったため、「黄牛」も使用された。かように、主として水牛が犠牲獣とされるのは、下棟東寨の古老たちの話によると、以下のようにまとめることができる。

すなわち、元々当地のミャオ族の祖先は非常に貧窮した生活を送っていたが、二人の兄弟が東および西の方に別々に出かけた。すると、兄弟がほぼ同時にそれぞれの行き先で、人々が牛を供儀して祖先を祭っている祭礼に遭遇した。

かかる祭事を挙行している人々が、それぞれの兄弟に告げるには、この祭りを行なえば、そのことによつてはじめて豊作になることができるのであると、いう。そして、人々は兄に一頭の水牛を、弟の方にも同様に一頭の水牛を贈つた。二人の兄弟は、それぞれもらつた水牛を東および西から連れて集落に帰つてきた。そこで、教わつたように祭事を行ない、祖先を祭つた。そうすると、その年度は非常な豊作となつた。そのため、かかる習慣が代々引きつがれていくことになつた。

以上のような伝承をもつのが両集落で実施されている「ヌーニイ」であるが、古老たちの話などを参照すると、「ヌーニイ」の活動の中心は祖先祭であることから、「ヌーニイ」は祖先祭りといえる。しかも、その一部に祭りを行なつた結果、豊作になつたという農耕儀礼的な側面も有していることが特色といえよう。

五 抽出農家の経済構造の特色

前章までにおいて、上棟東寨および下棟東寨の両集落の中心となつている農業の特色および、それに付随する農業儀礼に関して、分析・検討を重ねてきた。その分析・検討を受けて、両集落から各々二戸ずつ典型的と看做される農家を抽出し、生業の中心である農業を主体に、その他の経

済活動をも合わせて考察することにした。そのことにより、生活の基盤とでも称すべき両集落の経済構造に関して、詳細かつ具体的に把握できると考えたからである。そのためこの第4図を中心にして論を展開していく。

既に本文でも指摘したが、第4図からも明確に判明するように、農家の中心は水田稲作で、ウルチ種の米の栽培が圧倒的に多い。かかる点は、抽出農家四戸においてもすべて共通している。理由は、政府の強力な指導によることも事実であるが、多収量の収穫が期待できるため、従来では不足しがちであつた飯米を各戸で自給できるようにするためであつたと考えられる。その結果、人民共和国成立前において飯米を補完する目的でアワやヒエ・コウリヤンなどの雑穀が栽培されていたが、これらの作物の栽培はまったくみられなくなつた。

さらに、当時においては、住民が着用している衣服はすべて自家製が基本であつた。そのため、材料の綿糸を採用するために綿花を栽培していた。しかし、近年では、定期市などで綿糸などの糸類の購入が容易になり、ほとんどの農家で綿花が栽培されているものの、その量は大変少なくなつている。同様のことは、藍染めの材料であるアイの栽培に関しても該当する。つまり、かつては全戸で実施されていた藍染めも、定期市で染色された糸や布地さらには既

製服を購入することにより、その必要が著しく減少した。かように、栽培される農作物に関しては、その他例えば、野菜を中心にかつて多種類の作物が栽培されなかったことなど、人民共和国成立以前と現在ではかなり相違が認められる。

すなわち、以前のほぼ自給的かつ閉鎖的な生活から、定期市での種々の商品の購入の飛躍的な増加にみられるような貨幣経済の浸透による開放的な生活へと、転換が明白に行なわれたといえよう。このような転換を可能にした理由の一つに、近年における製炭での収入があげられる。かかる点が、両集落の経済上の特色ともいえる。次に、個々の農家の事例を検討していくことにする。

① D・W家の事例（第4図抽出農家番号①）

主人は五一歳で養老をしている。家族は妻と分家していない一人っ子の長男夫婦とその子供（二人）の合計六人である。水田は四畝所有しているが、すべて小規模なものばかりで合計すると五〇筆にも分散している。そのうち、数筆（合計〇・五畝）だけ、モチ種の米を栽培している。この品種を栽培する場所は決定している。すなわち、その場所とは、比較的高所に位置し、日当りがよくないが水便が良好な水田である。裏作として、水田の一部（一〜二畝ぐらい）にナタネを植え、その種子を収穫している。収穫した種子の約半分は食用油に搾油し自家消費に供されるが、



自家消費用の木炭を運ぶ娘達

残り半分は郷人民政府食糧站（食糧部）にもって行き、一斤当たり一・五元で売却する。D・W家では裏作にナタネを植える水田の一部には、間作として大根も栽培している。同家では大根もすべて自家消費となるが、大根の葉を中心に豚の飼料としている農家も存在する。他の水田には、この期間地味を肥やす目的で「緑肥」と呼ばれている植物を栽培している。なお、水田では養魚も行なっており、漁獲した魚の半分近くは「腌魚」として保存し、「ハレ」の日に客人が来たときなどに御馳走として食べる。

自宅近くに所有している菜園では、多くの野菜類などを栽培している。しかし、菜園自体の面積が狭いこともあり、すべて自家消費用のために栽培されている。そのため、微妙ではあるが栽培作物にはそれぞれの家庭の好みが見られる。山林には、杉苗を五〇〇株ばかり植林したばかりである。現在でも山林の一部を開墾し、山畑を造成している。ここでは、トウモロコシや多種のイモ類、タバコなどを栽培している。また山林では、春先にワラビやタケノコが採取できる。とくに前者は、そのまま食べたり、漬物として保存され、長期間主要な副食となっている。

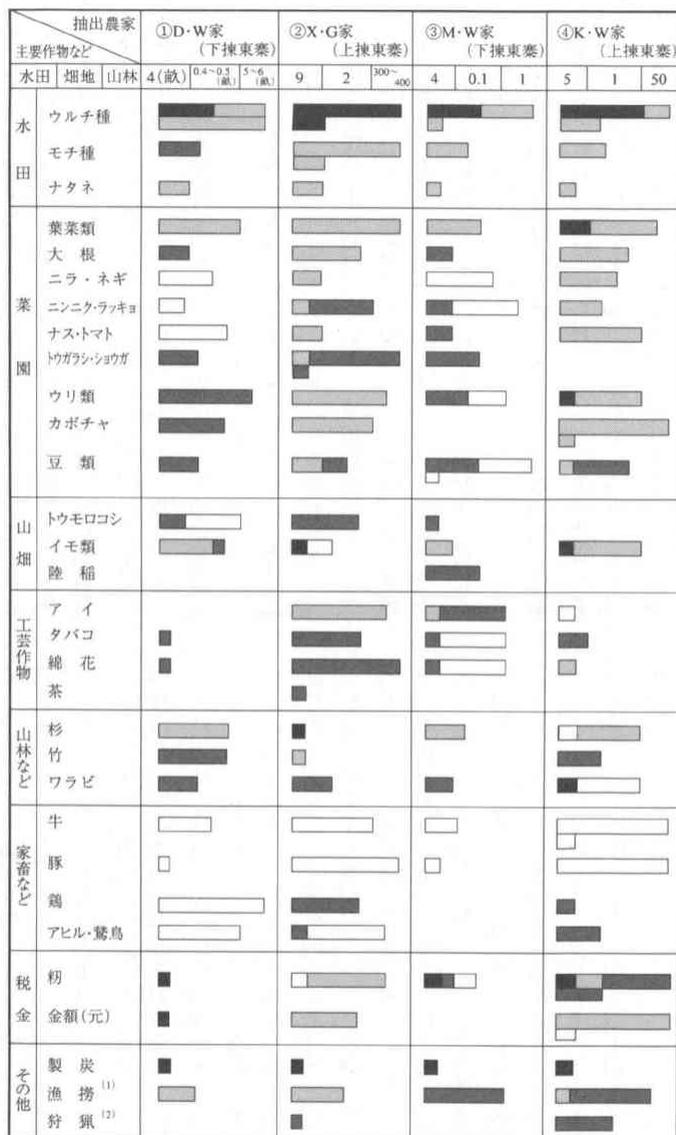
D・W家の現金収入としては、焼いた木炭をすべて自家消費に使用してしまうため、他家にみられる製炭による収入がないので、飼育した「黄牛」の売却が主要な収入源となっている。当家では「黄牛」五頭を飼育している。「黄牛」

は成牛であれば、一頭五〇〇〜八〇〇元で売却することが可能である。なお、土地改革以前は貧農階級に分類され、食糧が年間数ヶ月分不足をしたが、現在では主食である飯米に關しては充分足りている。税金としては、供出米を年間に概で一〇〇〇斤、その他全戸が負担する教育税・国防税などとして一〇〇元納めている。

② X・G家の事例（第4図抽出農家番号②）

主人は五六歳で、最近まで二十数年間棟東村共產党支部書記の職にあつた。当家は、土地改革のときには貧農に分類されていた。現在家族は一四人もおり、多人数である。理由は、第5図にみられるように、四人の子供すべてが各々結婚し、孫が生まれても分家せず、両親の家に同居しているからである。また、長女の配偶者は、事例①のD・Wの甥である。かように、上棟東寨および下棟東寨の両集落では通婚が多くみられる。

なお、X・Gの姓は滾である。滾姓を名乗る農家は上棟東寨に一〇戸存在する。滾姓の祖先に關しては、上棟東寨で多数派を占める呉姓の祖先とは多少異なる移動経路で、当寨にやって来たという伝承を有している。すなわち、X・Gによれば、本来の発祥地は不明であるが、呉姓の祖先と同様、江西省の吉安から移動してきたといわれている。吉安から広西壮族自治区に入り、その後山伝いに、当寨より一〇公里離れた高開に移つて来た。その後、当寨で定着す



第4図 事例農家の経済的基盤

注：(1) 河川漁業のみ。(2) 小鳥の保捕獲のみ。

出所：現地での聞き取りより作成。

るようになったとされる。この集団が移動し続けた理由としては、彼らが元来、杓子・盆・椀などの木地製品を製作する職能集団だったので、周辺の山林に材料となる広葉樹の原木が枯渇すると新しい場所を求めて移動するという、わが国の木地屋（師）のような集団であった。現在、X・Gはこれらの木地製品の製作はできないが、父親は製作できたという。

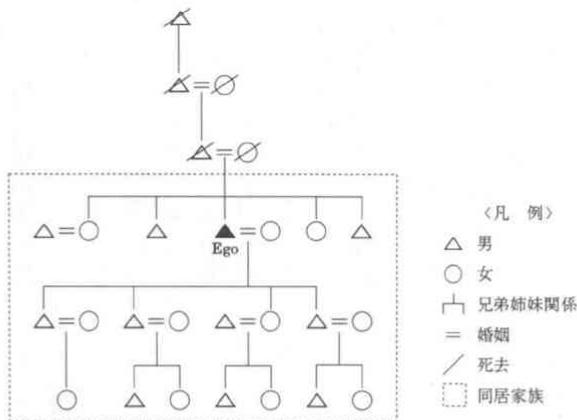
九畝を所有する水田は、D・W家ほどではないが合計三十六筆に分散している。そのうち、九割にウルチ種の米、残り一割にモチ種の米を栽培している。水田の裏作として、ナタネ・大根⁽⁶⁾および「緑肥」を植えている点は、D・W家と同様である。また、水田の一部には、コイの養殖を行っているが、これらのコイは、越冬させた親魚から孵化させた幼魚を養殖している。

菜園には、他家と同様に、野菜類を主体に多種類の作物が栽培されている。これらの作物はすべて自家消費用であるが、ウリ類としてはキュウリ・トウガン・ヘチマなど、また豆類としてはエンドウ豆・大豆・ササゲなどくに多種類のものを栽培していることが特色となっている。さらに、藍染めの材料となるアイも植えており、現在でも、家族の衣服の一部は自家製の綿糸を藍染めした綿布からつくられている。山畑では、サツマイモ・サトイモなどのイモ類の栽培が目立つ。そのなかでもサツマイモの収穫量が多

く、主食である飯米を補完する食糧となっている。また山畑では、チャの木を植え、年二回茶摘みを行ない製茶にしている。製茶はすべて自家消費に限定されている。

X・G家の山林は三〇〇〜四〇〇畝に達している。この面積は、上棟東寨の全山林のおよそ半分に相当する拡大なものである⁽⁶⁾。山林には一〇〇〇本ばかりの杉が植林されている。一九九四年には、そのうち樹齢十数年（幹の直径一〇〜三〇センチメートル）のもの一四〇本を、県内の木材関係の会社に二〇〇円で売却した。また山林には、五倍子・天麻などの薬草も栽培している。前者は乾燥したもの一斤当たり三元、後者は一斤当たり二〇円で売却することができ、年間合わせて五〇〇元ぐらいの収入となっている⁽⁶⁾。その他、木クラゲの栽培なども一九八九年より家施しており、年間七〇〇元ぐらいの収入を得ている。さらに山林では、ワラビ・タケノコなども採取するが、いずれも自家消費用である。これに対して、薬草・木クラゲなどの売却による収入があるためか、製炭も行なっているが、すべて自家消費に供されている。

家畜としては、「黄牛」と豚が飼育の中心となっている。一九九五年度では「黄牛」の成牛を一頭、三匹の子豚を売却し、合計八五〇元ほどの収入を得た。その他、狩猟や漁撈も行なっている。前者の狩猟に関しては、狩猟具として、鳥打ち銃三丁（一九七二年購入）・虎バサミ三個（一九七



第5図 X・G家の家族構成
出所：X・G家での聞き取りより作成。

三年購入)・竹バサミ三〇〜四〇組(自家製)を所有している。鳥打ち銃では、年間一〇斤ぐらいのスズメ・山バトなどの捕獲がある。虎バサミは最近獲物である野生動物が減少したため使用することが少なくなったが、これまで山羊・ヤマネコなどを捕獲したことがある。竹バサミは、他家でもほとんどが所有している、竹のバネを利用した弓状のもので、ネズミの捕獲専用である。捕獲期は八月から一二月にかけてで、水田の畦や家屋周辺などに設置している。後者の漁撈に関しては、七張の漁網(そのうち一張は投網)を所有し、年間一〇〇斤程度の漁獲がある。

租税としては、年間に概一六〇〇斤を上納する他、教育税・国防税それに幹部補助税など合計五〇〇元納めている。また、飯米に関しては充足しており、年間一斤当たり一・七元で一〇〇〇斤ほど売却している。

③ M・W家の事例(第4図抽出農家番号③)

主人のM・Wは六四歳である。当家は、土地改革当時貧農に分類されていた。そのため、生活は苦しく、主食である飯米が年間数カ月分不足した。M・W自身も一四歳のときから出稼ぎに出ている。期間は年間の七割にも達した。出稼ぎ先は、口江村・岑阡村および岩洞郷など周辺の農家(主としてトン族居住地区)で、農作業の補助をした。また、土地改革以前では、近くの山腹斜面で焼畑を行ない、アワ・トウモロコシなどを栽培し、食糧の補充に努めた。

水田は三〇筆に分かれ、合計四畝所有している。当家で、水田にはウルチ種の米を主体に栽培している。さらに、水田の裏作として、ナタネ・「緑肥」を植え、一部には養殖を実施している点も、他家と同様である。

〇二畝の面積の畑地に関しても、菜園と山畑の両方を所有している。とくに、M・W家の畑地で注目されるのは、従来からの伝統を守り、陸稲（モチ種）を植えている点である。しかし、水稲に比べて生産性が低いため、近年では量的には多く栽培されなくなった。また、山畑で主として栽培されているイモ類の保存については、畑地近くの山の斜面に、イモ穴を掘り貯蔵している。かかるイモ穴は、かつてほとんどの家にあつたが、現在では所有しているのが大変少なくなつた。

山林には、主として杉を栽培している。杉の植林は二〇年ほど前からはじめ、三〇〇本余りを植えた。さらに、山林の一部（〇・一畝）には四〇〇本ばかりの油茶（*Camelia semiserrata*）が植えられている。油茶は先代が植林したもので、八月に種子が実る。種子からは食用油が搾油可能である。種子を年間一〇〇斤ほど収穫するが、搾油した油はすべて自家消費に当てている。

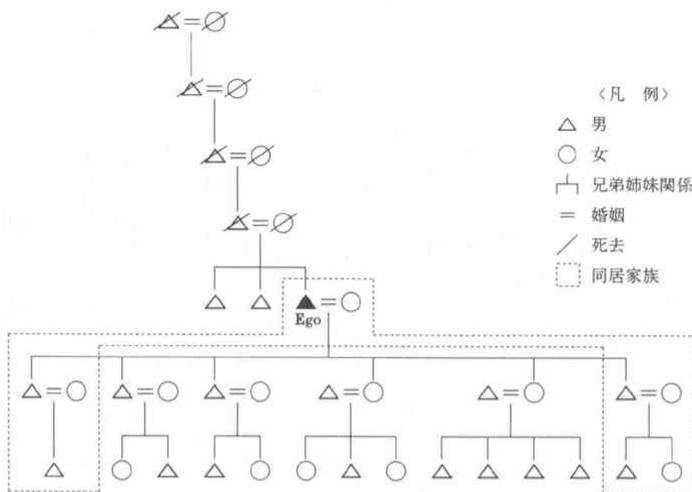
家畜も「黄牛」、豚を飼育している。しかし、近年は売却したことがない。狩猟具として、鳥打ち銃一丁、竹バサミ二〇組余りを所有しているが、あまり捕獲する機会がな

いという。ただし、罫りの鳥を入れた鳥籠のそばに、先端にトリモチを付けた棒を数本立て、小鳥を捕獲している。当家では、現在主要な現金収入としては冬季を中心に年間一〇〇斤ほど焼いている木炭である。製炭は口江村に運び、そこで売却している。

租税としては、年間一〇二斤の粃を上納している。その他の税に関しては収入がほとんどないため納入することができない。

④ K・W家の事例（第4図抽出農家番号④）

主人のK・Wは六〇歳である。当家は、土地改革当時中農に分類されていた。一九八八年に次男・三男が相次ぎ分家したため、現在、長男および四男夫婦とその子供たちと共に住んでいる。家族数は九人（第6図）である。水田および畑作に関しては、栽培している作物の品種はほとんど他家と共通している。当家の特色としては、主人のK・Wが狩猟および漁撈を行なうことが好きで、また得意としている。狩猟に関しては、鳥打ち銃一丁、竹バサミ四〇組余りを所有しているか、中心は、M・W家でも行なっているトリモチによる小鳥（現地で「地麻鳥」と呼んでいる鳥など）猟で、年間三〇〜四〇斤の捕獲がある。漁撈に関しては、水田養殖の他に、年中近くの河川で漁撈を実施している。漁獲量は年間一〇〇斤余りであるが、年々農業などの影響で減少傾向にある。漁網は大小合わせて一三張も所有



第6図 K・W家の家族構成

出所：K・W家での聞き取りより作成。

している。

K・W家でも製炭を行なっている。期間は冬季（一〇～一二月）で、四回ほど窯入れを行なう。原料の木材は、「青桐櫟」(*Cyclobalanopsis glauca*) や「麻櫟樹」(*Quercus acutissima*) などのカシ属やクリ属の広葉樹である。炭焼きは、以下の順序で行なわれる。最初に三～四日かけて材料の木材を切り出し、適当な長さの輪切にする。そして、窯の中に入れて一日かけて焼きあげる。焼き終わると半日かから一日ほど窯を封鎖する。蒸し焼きにするためである。その後、三～四日間放置し冷却した後窯から取り出す。年間一〇〇〇斤ほど製炭をつくるが、そのうち、三〇〇～四〇〇斤を一斤当たり一〇・四円で売却している。なお、両集落を筆頭に棟東村では、製炭はすべて冬季の暖房用のみに用いられている。

家畜の飼育も行なっている。一九九四年度に、「黄牛」三頭を売却した。売却した「黄牛」は三頭とも成牛で体重が重かったため、一頭当たり一一〇〇元の値段がついた。また、豚も二匹売却した。糶税は、糶一二七〇斤上納した他、一九九四年度は家畜を多数売却し収入が多かったため、八〇〇～九〇〇元納めた。

六 社会構造の特色

—— 結びに代えて ——

前章まで上棟東寨および下棟東寨の両集落を事例として、「高坡ミャオ」族社会の農業を主体とする生業形態を中心に、論を展開してきた。本来であれば、かかる生業形態を基盤に成立している両集落の社会構造についての分析・検討も実施する必要がある。しかしながら、本文でも言及したように、比較的小規模な社会である集落を事例として設定し、フィールドサーヴェイを行なってきたが、社会主義国家体制を堅持していることなどから、調査期間・内容に関しては種々の制約が加えられていた。とくに、社会構造の把握は、生業形態などを中心とする経済構造の調査以上に時間を要する。それ故、制限された条件内では、社会構造について十分な調査を試みる事が不可能であった。⁶⁵⁾

しかし、社会構造の一部に関しては解明できた点も存在する。以下では、かかる点を中心に論じること本稿の結びに代えたいと思う。すなわち、両集落の社会構造の基礎的な部分の多くは、生業形態を主体とする経済構造に規定されていると看做せるからである。

人民共和国成立前から、調査対象である上棟東寨および

下棟東寨の両集落に居住する住民の治安・財産などを伝統的に守ってきたのは、寨老と呼ばれる長老である。寨老は、人民公社時代には一時存在しなかったが、一九八〇年に生産責任制が導入されたのを契機として、復活された。寨老になるには男性に限定されるが、住民の選挙により選ばれる。選定に際しては、威信があり、話上手で、物の見方が公平であることなどが条件とされる。なお、寨老になっても報酬はない。現在、上棟東寨・下棟東寨に各々二名ずつ寨老がいる。寨老の主要な任務は次のようである。

- (a) 他集落のものが寨内に侵入することを防ぐこと。
- (b) 寨内の婚姻や耕地・山林における紛糾やもめごとの仲裁。

(c) 年越しや節日などの文化活動を組織し、蘆笙を吹いたり、「ダツオー」を指揮する。

上棟東寨のG・W(六二歳)は一九九一年より寨老になった。G・Wが寨老の職についてから右の(b)に関する問題(いずれも婚姻)が四件起こり、その仲裁を行なった。⁶⁶⁾

婚姻に関する事件の一つは次のような内容であった。すなわち、上棟東寨の男性と他寨の女性が婚約した。婚約が成立すると、男女が互いに贈り物を交換するということが習慣となっていた。一般には、男性は女性に銀製のブレスレットを、女性は男性に一メートルの布地を贈る。この婚約後、女性の方が何らかの事情で婚約を破棄したいと考え、

そのことを男性に伝え、男性の方も同意すればそのまま婚約は解消できる。しかし、男性が婚約の解消を望まなければ、二名の寨老が仲裁することになる。この事件では寨老の仲裁が成功し、無事に婚約を解消することができた。賠償の条件とは、一匹の豚をつぶし、その肉を男性側に贈る他に、一二本の青竹の筒に入れた酒（「一二筒酒」）と同じく一二筒に入れた米（「一二筒米」）を付けた。もし、男性の方が婚約を破棄したいのであれば、同様に寨老の仲裁が行なわれるという。

かように、寨老は、村の行政の力を借りずに伝統的な方法で種々の問題や事件に対処してきた。その規範としたのが上棟東寨および下棟東寨の両集落に共通する「村民規約」である。かかる規約は口頭で決められたもので、成文化されていなかった。その主要内容は次の四項目であった。

- ① 風水樹の保護。
- ② 開墾地の保護。
- ③ 婚姻に係したものを。
- ④ 窃盗に係したものを。

このような規約は、人民公社時代には破棄された。しかし、一九八〇年に従来の「村民規約」とほぼ同じものが制定され、一九九五年にその一部が修正された。修正された「村民規約」も従来通り口頭によるもので、主要な修正点は次のようであった。

- (ア) もし、アヒルでもって賠償するときには、六筒の酒（「六筒酒」）と六筒の米（「六筒米」）を付けること。
- (イ) 年越しや節日などの行事に、他の集落の客人が参加するときには、寨老の指揮に従うこと。

(ウ) とくに口論やめ事の発生を防ぐこと。
かくして、寨老を中心に両集落の住民の生活は、円滑に平穩無事に送ることができたのであった。かかる理由の一つは、農業を中心とした生業が伝統的には経済的基盤となってきたが、その経済的な基盤があまりにも貧弱なため、住民が互いに助け合いながら生活しなければならなかったからであると思われる。すなわち、住民たちの助け合いの中心となり、そのシンボルとなったのが寨老であったと推定できる。

しかしながら、抽出農家の事例でも、租税の納入に関する格差が認められることなどからも明白なごとく、現在においては、各戸間にかんがりの経済的な格差がみられる。しかも、その格差が拡大するような傾向が存在する。

すなわち、一九九五年に新道が開通し、トラックなどの車輛が両集落まで容易に入ることによって、これまで以上に製炭や木材の伐採が増加するようになると思われる。このことが、生業形態を中心に比較的ほほ自給的な生活を送ってきた両集落の住民にとって、貨幣経済のより強力なネットワークの中に組み込まれることになると考えられる。そのと

きに、伝統的に集落の治安や財産を守ってきた耆老の影響力はどこまで行使できるであろうか。疑問といわざるを得ない。上棟東寨および下棟東寨の両集落に代表される「高坡ミャオ」族の社会は、わが国の農山村以上に、経済的、社会的にも大きな転換期に差しかかっていると思われる。

注

〈1〉 といつても、ブイ族やシユイ族の一部のように、河谷などの平坦地を中心に分布・居住する民族集団も存在する。しかし、土地条件の良い地域には漢民族が占拠している場合が多い。

なお、明王朝時代にも屯田兵として当地に移住した漢民族の直接の子孫と俗称されている老漢族が、貴州省の省都貴陽市西部に位置する安順市近郊に居住している。

〈2〉 その結果、人口数が少ない民族集団ほど土地条件の劣悪な海拔高度の高い地域に追いやられてしまったように思える。

〈3〉 インドシナ半島北部に居住するミャオ族は、一般にはメオ (Meo) 族あるいはモン (Hmong) 族などと称されている。かかる民族集団に関しては、第二次世界大戦前まではフランス人民族学者などによる調査・研究がなされ、多くの研究業績が存在する。戦後においても、以下のように著作や論考が存在する。

Lemoine, J. (1972) "Un Village Hmong Vert du Haut

Laos", Editions du Centre Nationale de la Recherche Scientifique, Paris.

菊池一雅 (一九七九) 『ケシをつくる人々』三省堂 (三省堂選書)

田畑久夫・金丸良子 (一九九七) 『ベトナムの山岳民族』2 『地理』四二一八、九六一一―八頁など。

〈4〉 同様に、四川省と雲南省の省境の山岳地帯を中心に居住するイ族も、国境を越えて南下し、インドシナ半島北部に分布・居住している。しかし、これらインドシナ半島北部の山岳地帯に展開するイ族は、例えば、ベトナムは三二〇〇人 (一九九〇年統計) というように、ミャオ族 (五五万八〇〇〇人)、ヤオ族 (ダオ族と呼ばれる。四七万四〇〇〇人) と比較すると非常に少ない。

Le Sy Giao (1995) "Dan Tộc Học Đại cương" Nha Xuât Bản Giáo Dục, pp. 129-134.

〈5〉 一九九〇年度人口センサスの結果である。正確には七三九万八〇三五人で、チワン族・回族・ウイグル族・イ族に次ぐ人口をもつ。なお、中華人民共和国においては、領土内に居住する非漢民族を少数民族と称している。その認定は、国家民族事務委員会が政府の指導の下で決定する。現在では、五五の民族集団が少数民族として識別されている。それ以外に、貴州省を中心に、例えば、シー族、グジャ族と呼ばれる民族集団など、まだ識別されていない集団が約七五万人弱存在する。

〈6〉 ミャオ族の伝統的な衣裳は、トン族・シユイ族・ヤオ

族など周辺に居住する少数民族と同様に男女とも上衣とズボンまたはスカート（ブリーツスカート）というツーピースが基本となつている。すなわち、男性の場合は上衣とズボン、女性の場合は上衣とスカートを常用している。

〈7〉 例えば、女性が青色系統のブリーツスカートを着用しておれば「青ミャオ」族、黒色および白色系統のものをそれぞれで常用しておれば、各々「黒ミャオ」族・「白ミャオ」族と称された。さらに、花模様刺繍をほどこしたブリーツスカートをはいっているものは「花ミャオ」族と呼ばれた。

なお、ミャオ族の女性が着用しているこれらブリーツスカートの素地は、伝統的には自らが糸（木綿）をつむぎ、染色（藍染め）を行なつた。「黒ミャオ」族のブリーツスカートの色が黒色を呈しているのは藍染めを何回となく繰り返して実施すると、青色から黒色になるためである。また、「白ミャオ」族の女性は、ブリーツスカートの素地として麻を用いている。そのため、藍染めができず、白のままのものを常用している。

ミャオ族が当地域で行なつているこれら藍染めの原料のアイは、わが国で一般的に用いられているタデ科の「タデアイ」(*Polygonum tinctorum*)ではなく、キツネノマゴ科の「リュウキウアイ」(*Strobilanthus cusia*)である。

〈8〉 わが国でミャオ族を最初に調査・研究した鳥居龍藏も、ミャオ族の分派集団に関しては、女性が着用している衣裳の色彩などに注目して次表のような区分を行なつた。

分派名	特色	分布地域
紅ミャオ	赤色の衣服を着用	湖南省に接する貴州省東部
青ミャオ	青色の衣服を着用	貴州省中央部
白ミャオ	白色の衣服を着用	貴州省中央部
黒ミャオ	黒色の衣服を着用	貴州省東南部
花ミャオ	蠟繡染めおよび縫取りした衣服を着用	貴州省西部・雲南省・広西省（現広西壮族自治区）、インドシナ半島北部

出所…鳥居龍藏（一九〇七）『苗族調査報告』東京帝國大學理科大學人類学教室。鳥居龍藏（一九七六）『鳥居龍藏全集 第一一巻』朝日新聞社、四四―四七頁より作成。

なお、鳥居龍藏の西南中国におけるミャオ族調査に関しては、以下の拙著を参照のこと。

田畑久夫（一九九七）『民族学者 鳥居龍藏 アジア調査の軌跡』古今書院、五七―八二頁。

〈9〉 同様に、少数民族としては第一三位の人口（約二二三万人強）を占めるヤオ族も多数の分派集団が認められるが、民族衣裳による便宜的な区分が存在しない。つまり、ヤオ族に関しては、以下の著作や論文などにみられるように、方言を中心として言語系統からの分類が主体であるといえる。

盤朝月（一九八八）『瑤族支系及其分布浅談』『貴州民族研究』第一期、九一―九五頁。

柏果成・史繼忠・石海波（一九九〇）『貴州瑤族』貴州民族出版社など。

ところが、ヤオ族の移動先の最南端であるベトナム北部の山岳地帯においては、ミャオ族と同様に、ヤオ族は、主として女性が日常的に着用している民族衣裳の色彩などをメルクマールとして、「黒ダオ」族・「白ダオ」族・「青ダオ」族・「赤ダオ」族などというように、区分されている。

前掲〔1〕田畑久夫・金丸良子（一九九七）、九五頁。

〔10〕雲貴高原の山間部に形成された小盆地の総称。「壩子」の海拔高度は一定しておらず、例えば、貴州省東部に位置する榕江盆地の海拔高度三二〇メートルから、西部にある威寧草海盆地の海拔高度二一六〇メートルまで相当の開きが存在する。成因としては、第三紀以降のネオテクトニク運動のため、上昇した軟弱な基盤から構成されている雲貴高原が、高原上を流れる諸河川の浸蝕作用を受けて形成されたといわれている。「壩子」の規模も、其の内部に県城が形成されるほど大規模なものから、ごく小規模なものまで種々の形態がみられる。

貴州省地方志編纂委員会編（一九八八）『貴州省志 地理志』下冊、貴州人民出版社、七二五―七二六頁。

〔11〕「平地ミャオ」族および、「高坡ミャオ」族はともに山間部を主要な生活空間とし、農業経営が生業の中心となっているという共通点がみられる。しかし、原初形態 (Proto-Phase) においては、前者が水田稲作、後者が焼畑経営が主体というように、農業形態が著しく異なっていた。かかる点に関しては以下の拙論などで論じたことがあるので、参照されたい。

田畑久夫（一九九四）「中国雲貴高原の自然と住民(10)

——山棲みの少数民族を事例として——」『學苑』（昭和女子大学）六五六、三九―四〇頁。

〔12〕それ故、「平地ミャオ」族は別名「長裙ミャオ」族（長いスカートをはくミャオ族）、同様に「高坡ミャオ」族は「短裙ミャオ」族（短いスカートを着用するミャオ族）と称されることもある。後者の集団の中でも、貴州省東部で有数の高山である雷公山（二一九七メートル）の山中に居住するミャオ族の女性は、大変丈の短いスカートを常用している。そのため、現地では「超短裙ミャオ」族と呼ばれている。

季廷貴（一九九二）『雷公山上の苗家』貴州民族出版社。

〔13〕鈴木正崇・金丸良子（一九八五）『西南中国の少数民族』貴州省苗族民俗誌——古今書院、二二六頁。

〔14〕自称は「ダムー」(Dǎmǎ) という。なお、揀東村の調査は、一九九五年二月下旬から翌年一月上旬にかけて実施した。同行は、貴州省黔南苗族侗族自治州黎平県文化局局长呉定国先生、麗澤大学外国語学部金丸良子助教授などであった。

〔15〕例えば、田畑久夫（一九九五）「中国雲貴高原の「高坡ミャオ」族の生活(1)——貴州省・從江県加勉郷別鳩村の場合——」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』二、九七―一〇七頁。

田畑久夫（一九九八）「高坡ミャオ」族の生業形態——貴州省・從江県谷坪郷山崗村を事例として——」『東アジア研究』一九、二一―四六頁など。

〔16〕筆者らも、以下にみられるように、一九八七年までの中国国内におけるミャオ族の研究史を著作および報告書な

どの単行本に限って整理・検討したことがある。その後、中国国内におけるミャオ族研究の動向はあまり変化が認められないように思われる。というのは、近年、地元設置されている各省の民族研究所および民族事務委員会民族研究所などの研究機関では、予算の減少に伴うな研究費および研究員の削減が行なわれ、特記できるような大きな研究成果が皆無であるという状態となっている。

田畑久夫・金丸良子（一九八九）『中国雲貴高原の少数民族 ミャオ族・トン族』白帝社、二二八—三三二頁など。

〈17〉 その理由としては、例えば、第1表にみられる「ムー」と「モン」を各々自称している集団において典型的にみられるように、同じミャオ族でありながら分派集団が異なれば、互いに言葉がまったく通じないことなどが考えられる。

〈18〉 金丸良子（一九九七）『制約の多い社会主義国でのフィールドサーヴェイの前提』『地理』四二—四、六四—六八頁。

〈19〉 日本人研究者の場合に限定しても、次のものがあげられる。

坪井洋文編（一九八七）『華南畑作村落の社会と文化——貴州省西北地区の少数民族を訪ねて——』国立歴史民俗博物館。

前掲〈16〉田畑久夫・金丸良子（一九八九）。

田畑久夫・金丸良子（一九九五）『中国少数民族誌 雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房。

福田アジオ編（一九九六）『中国貴州苗族の民俗文化——日本と中国との農耕文化の比較研究——』文部省科学研究費補助金（海外学術研究）研究成果報告書など。

田畑久夫・金丸良子（一九九五）『中国少数民族誌 雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房。

〈20〉 例えば、萩原秀三郎（一九八七）『稲を伝えた民族——苗族と江南の民族社会——』雄山閣、

萩原秀三郎（一九九六）『稲と鳥と太陽の道——日本文化の原点を追う——』大修館書店など。

〈21〉 例えば、照葉樹林文化論と称されている作業仮説がその代表といえる。なお、照葉樹林文化論に関しては拙論も参照されたい。

中尾佐助・佐々木高明（一九九二）『フィールドワークの記録③ 照葉樹林文化と日本』くもん出版。

田畑久夫（一九九〇）『照葉樹林文化論と雲貴高原東部の少数民族の生業形態』『兵庫地理』三五、四三—五八頁。

田畑久夫（一九九一—一九九三）『照葉樹林文化論の背景とその展開（1）—（3）』『兵庫地理』三六、二二—三七頁、同三七、二八—四二頁、同三八、二二—二九頁など。

〈22〉 前掲〈15〉田畑久夫（一九九八）二二—二二頁など。

〈23〉 その他、とくに注目されるのは、石姓の祖先である。すなわち、石姓の祖先は、以前広西壮族自治区から物乞いをしながら、山伝いに当地にやって来、定着したという。

〈24〉 他の理由としては、ミャオ族が当地に定着する要因ともなっているが、水利に比較的恵まれている点が指摘できる。すなわち、棟東村が所属している江口郷は、県城黎平周辺を東流し、東シナ海（東海）に流れ込む長江水系の支流の分水嶺を越えて、南流し、南シナ海（南海）に達する珠江の最大支流西江上流都柳江水系の最上流地域に位置しているからである。そのため、周辺には小河川が多く存在しているのである。

〈25〉 それ故、上棟東寨のことを老寨と現地住民は称して

いる。なお、同村内に存在するミャオ族の集落である平客寨は、上揀東寨のミャオ族と直接に関係がないミャオ族の集落であるといわれている。

〈26〉 揀東村では、他の集落はすべてミャオ族が居住しているが、振剛寨のみが漢民族が居住している。その理由は、同寨周辺の豊富な広葉樹を利用して製炭を実施しているのに適しているからである。なお、揀東村のミャオ族は、製炭の技術を伝統的に有していなかった。そこで現在では、一部のミャオ族の若者や子供が漢民族の指導を受け、製炭の技術を学習し、多くの家では製炭を出荷するまでになっている。〈27〉 上揀東寨には「グル」・「ニイウヤン」と各々称されている井戸が、下揀東寨には「ワイウージエジアン」と呼ばれている井戸が存在する。

〈28〉 ミャオ族の正月は、秋の収穫が終了したころ、つまり農曆の一〇月ごろである。この正月を「ノン・ラン」(苗年)といい、ミャオ族の中心的な年中行事である。年越しはその前日で、「ツオクー」などを行なった後、人々は親戚や友人宅を互いに訪問したりして、楽しい一時を過ごす。現在では、漢民族の習慣にならって、「春節」も正月として過している。なお、年越しの行事は、上揀東寨・下揀東寨の両集落が合同で行なう。最近では、一九九二年の「春節」の三日・五日・七日・九日に「ダンシユワン」において「ツオクー」が挙行された。

〈29〉 鬮牛はトン族の伝統的な習慣である。近くにトン族が居住しているため、かかる行事も実施されることになったものと推定される。なお、上揀東寨および下揀東寨の両集

落では、飼育するための豊富な水が不足するなどの理由から、水牛はあまり飼育されていない。

〈30〉 雲貴高原では現在でも農山村地帯の少数民族居住地区を中心に、常設の市場がなく、月に六回開催される六斎市などの定期市が存在する(近年では、政府の指導で日曜日ごとに開催するものが増加した)。これらの定期市が、住民の経済生活の中心になると同時に、テレビ・ラジオ・新聞などの普及がみられない住民にとっては新しいニュースの情報源となっている。村内には定期市が存在しないので、上揀東寨や下揀東寨の住民は、生活用品に関しては口江(郷人民政府所在地)や陸路で二五公里(水路では一〇公里)離れた双江などに出かける。

〈31〉 トン族の場合、「鼓楼」がこれに該当する建物と思われる。本来ミャオ族は、この種の集会所をもたなかったようである。それ故、「カルオワン」も本文に前述したトイレなどと同様に、トン族の影響を受けているのではないかと推察される。

〈32〉 小学校の教員は、国家が給与の全額を負担する「公辦教師」と、給与の一部を国家が負担し、残りの給与や穀物を村や寨が負担する「民辦教師」に区分できる。前者の場合、月給が約三二〇元、後者では、一般には国家から月に三八元と村より三六斤(一斤は五〇〇グラム)の米が支給されることになっているが、村や寨の財政事情などで多少異なる場合も存在する。例えば、平客寨の小学校の「民辦教師」の場合、国家から一ヵ月六〇元余りの給与と、村から四五斤の米が支給されている。また、「民辦教師」から「公

「辦教師」にかかわることが可能であるが、教職歴十年以上の他に、次のような要件を満たす必要があるとされる。

- (a) 優秀な教員であること。
- (b) 中等師範卒程度の学歴を有すること（通信教育で資格をとることができる）。
- (c) 児童を小学校に入れる入学率。
- (d) テスト（能力・文化程度など）にパスすること。

なお、その他「公辦教師」になると、戸籍も「農業」戸籍から「非農業」戸籍となり、移動が自由となる。「振剛寨小学」では、教員が一九九五年から「公辦教師」の資格を有するようになったので、第二学年までの指導ができるようになった。

〔33〕 校長は、振剛寨出身の漢民族で、近くの岩洞中学校を卒業後、振剛寨の小学校などで約二〇年間教え、一九八九年に現在の「揀東小学」に移った。一九九一年に「民辦教師」から「公辦教師」にかわった。二名の「民辦教師」は共にトン族である。そのうち一名は岩洞郷出身、他の一名は口江郷出身者である。なお、兩名の「民辦教師」の給与は同額で、国家より月給として五〇元余り、その他村より数十元、さらに寨から米が数十斤支給されている。

〔34〕 「揀東小学」の分校的性格を有する振剛寨および平客寨の小学校は、いずれも一九七六年ごろに設立された。

〔35〕 かように、机などの備品の整備と共に、教員の給与体系の見直しも行なわれ、教員の待遇が改善された。この点は、「教育税」を徴収することで住民に負担をかけているが、政府の方も教育問題を重視している結果ともいえよう。そのため、「民辦教師」の希望者がとくに近年では多くなり、

現在では大部分を女性が占めている。

〔36〕 いわゆる焼畑農業のことをさす。当寨の焼畑は、本文で示したように火入れを実施した翌年のみに使用され、その後は放棄された。

〔37〕 これらトン族が居住する集落は、一般的に広い水田を所有している家が多かった。しかも、ミャオ族に比べると海拔高度の低い平坦地に水田を所有しているため、比較的高地に居住する両寨のミャオ族の水田の田植えおよび収穫の時期が若干異なった。この期間などに主として出かけたのであった。

〔38〕 年間にすれば、出稼ぎは一〇〜二〇日間だった。なお、日当としては、粳の代わりに〇・五斤の塩、二銅毫（銅貨二枚）、布地三尺のこともあった。

〔39〕 水田に水を張り魚を養殖する、いわゆる水田養魚も伝統的にはミャオ族の習慣ではなかった。定着後、周辺に住するトン族の習慣を学んだものと思われる。

〔40〕 当村では、老人とは年齢五〇歳以上、子供とは一六歳以下をそれぞれ意味した。

〔41〕 かように、当村では、把という単位で粳の収穫を計算する習慣があった。現在では、主として単位としては斤が使用されているが、一部では把も使われている。およそ一把は二〇斤に相当し、水田面積でいえば〇・五畝（一畝は六・六七アールとなる）。

〔42〕 揀東村では気温に関するデータが存在しないが、黎平県の県城黎平では、年間の平均気温が摂氏一五・六度、月別平均気温が最高となる八月でも摂氏二五・八度である。

前掲〔10〕貴州省地方志編纂委員会編（一九八四）七七九頁。

〈43〉 漁獲したばかりの生魚に、蒸したモチ米をはさみ、桶などに重ねて入れて塩をし長期間漬け込み乳酸発酵させたもの。一種のナレズシである。調味料としてトウガラシを加えることが多い。トン族の伝統的な民族料理とされているので、ミャオ族は、周辺に居住するトン族からかかる技法を習得したものと思われる。なお、トン族の「腌魚」との相違は、調味料として使用するトウガラシの量の差で、ミャオ族の場合比較的少ない。わが国の琵琶湖畔でみられるフナズシは、その典型的な事例といえる。また、捕獲した小鳥の一部も同様の方法で漬け込まれる。これを「腌肉」と呼んでいる。

〈44〉 その他、「ハレ」の日には、ニワトリ・豚などの肉類も食事には欠かせないものである。

〈45〉 この他、両集落では、冬季に水田の一部に現地で「緑肥」と称している、水田の肥料とする植物を栽培している。

〈46〉 土地改革以前において、両集落では裏作としていかなる作物も栽培しなかった。したがって、その影響もあると思われるが、両集落のミャオ族は他の地域のミャオ族と同様に、漢民族のように食用油を多量に消費しない。

〈47〉 現在でも、このタイプの耕地は開墾中であることなどから、村の行政機関でも、このタイプの各戸の畑地の正確な面積は把握していないようである。

〈48〉 一般に、雲貴高原東部に居住するミャオ族は、ほぼ同地域に分布・居住するトン族はどの影響もあり、調味料の中心はトウガラシで、辛い味を好む、しかしながら、上棟東寨および下棟東の両集落の場合、トウガラシが調味料の

主体となっているが、味付けはあまり辛くなく、広西壮族自治区に近いためかシヨウガを調味料としてよく用いている。

〈49〉 農耕および農業は基本的には耕地に種子を播き、収穫物を得るという一連の同様の過程をとるが、前者の方が使用する農具や技術などが初歩的あるいは原始的な状態の場合をいう。かかる事例としては、焼畑農業が代表とされる。このように、農耕と農業とは発展段階において異なるものであると認識されている。しかし、一般に農耕儀礼と称せられる祭事行事に関しては、農業に付随した儀礼についても、農耕儀礼と呼ばれている。

なお、周知のように、英語においては農耕と農業の区別はなく共に“agriculture”（日常的には“farming”）と称せられている。

〈50〉 なお、年中行事も季節のリズムをもって展開される点において、農耕儀礼と同内容の祭事行事と看做されやすい。しかし、年中行事は、基本的には農耕や農業に付随する必要がないこと、厳密に定められた月日を伴うことの二点が農耕儀礼と区別されている。ただし、後述するように、農耕儀礼においても明確に月日が特定されている場合もある。

〈51〉 しかしながら、例えば、ベトナム北部の山岳地帯に居住するモン（Hmong）族の間では、現在でも焼畑における陸稲栽培がトウモロコシ栽培とともに中心となっている。

〈52〉 雲貴高原東部では、ミャオ族よりも海拔高度の高い地点を生活空間としている「白褲ヤオ」族などの場合、伝統的には、狩猟・焼畑農業などを行ないながら、山伝いを移動する生活を送ってきたのであるが、近年、政府の指導の

下に、定着が促進された。その定着に関しては、水田や焼畑の耕作技術に優れているトン族やブイ族などの家族を、一戸から数戸新しくできた集落内に居住させることで、彼らに農業技術をマスターさせようとしている。

前掲(19)田畑久夫・金丸良子(一九九五)一八二—一九四頁。

(53) 例えば、同じ「高坡ミャオ」族の集落である從江県谷坪郷山崗村の場合、「ノン・ラン」は、一二月の「初三」(三日)と決まっている。当日は、収穫が終了した水田の一部において、蘆笙を吹き、それに合わせて全住民が踊り明かす。そして、この儀礼が終了すると、農作業に関して、新年度を迎えることになるという。

前掲(15)田畑久夫(一九九八)三六一—三七頁。

(54) 以前は、集落の住民の中から選ばれた寨老が曆を参照しながら、日を決定していた。一般には、四月八日のことが多かった。

(55) 上揀東寨および下揀東寨では、一家族あるいは二家族で一頭の割で牛を供犠するので、両集落では約五〇頭の牛が一度に屠られることになる。

(56) しかしながら、住民の大変強い希望にもかかわらず、ほとんどのミャオ族の集落では、「ヌーニイ」は現在でも禁止されている。また、海拔高度が高く水牛の飼育が困難な地域や貧困で多数の牛をころせない地域のミャオ族の集落では、牛も屠るが豚がそれに代っているところも存在する。

(57) 次回は、一九九六年九月一九日に挙行することになっている。両集落での「ヌーニイ」を參觀することができな

かったが、一九九七年一月末から二月上旬にかけて約一週間実施された。同じ從江県加勉郷別鳩村で行なった祭事に関しては、儀礼の全日程ではないが直接參觀することができた。その儀礼に関しては、以下にみられるように、日本民俗学会で口頭研究発表を行なった。

金丸良子・田畑久夫(一九九八)「ミャオ族の「鼓社節」——貴州省・從江県加勉郷別鳩村を事例として——」日本民俗学会五〇周年記念・第五〇回年会(於佛敎大学、一〇月四日)。

なお、「喫鼓臟」は「鼓社節」と呼ばれることも多い。また、別鳩村では「鼓社節」のことを「ナウ・フーナウ」と称している。

(58) 漢籍史料や他のミャオ族に伝わる口承などでは、長江中流がミャオ族の故地であるとするものが多いので、そこで水田稲作に従事していたとも考えられるが、とくに「高坡ミャオ」族の場合、伝統的には定着して水田稲作を行なう、いわゆる農民ではなかった。また、彼らは水牛を飼育するような自然条件の場所に居住していなかった。これらの事実を考慮すると、両集落のミャオ族の古老に伝わっている伝承は、速断は慎まなければならないが、定着後につくられた比較的新しいものであるか、あるいは他の「平地ミャオ」族の伝承をそのまま両集落の伝承としたのではないかと考えられる。

(59) 当家では水田養殖の他に、漁獲用の網を二張所有している。近くの河川でコイ・「鉛魚」・「鯛魚」などの魚を捕獲する。漁期は六月から七月が中心で、年間四—五斤の漁

獲がある。

〔60〕周知のように、滾姓の「滾」という漢字は「まわる」とか「ころがる」という意味をもつ。このことから、彼らがかつて移動生活を行なってきた集団であることがうかがえる。

〔61〕当家および両集落の多くの家では、大根を菜園においても栽培している。菜園での大根は八月に播種し、一二月ごろ収穫するが、ほとんどが豚の飼料となる。

〔62〕かかる理由は不明である。X・Gが長期間村の共産党支部書記を歴任していたことと関係があるかも知れない。

〔63〕かように薬草の売却による収入は大きい、手入れが煩雑などの理由から他家ではほとんど栽培がみられない。

〔64〕日当は食事付きで四斤の粳であった。

〔65〕かかる関係から、人民共和国成立後、外国人研究者の中国農村部における社会構造に関する調査・研究は等閑視され続けてきた。しかし、第二次世界大戦前までは、次の「平野・戒能」論争に代表されるように、伝統的な中国の村落社会について、その構造や性格に関して多大の関心もたれ、一定の成果がみられた。

平野義太郎（一九四五）『大アジア主義の歴史的基礎』河出書房。

戒能通孝（一九四三）『法律社会学の諸問題』有斐閣など。

なお、近年では、中国人研究者による社会構造を中心とする社会調査も増加する傾向がみられる。例えば、棟東村の近くのトン族社会を分析した以下の論攷などがその典型的なものである。

向零（一九八五）「従江県九洞侗族社会組織与習慣法」

貴州省民族研究所編『貴州民族調査之三』貴州省民族研究所、二二—二四頁所収。

向零（一九九三）「重訪九洞——下半款侗族社会調査——」貴州省民族研究所・貴州民族研究学会編『貴州民族調査之十』貴州民族研究所、一九八—二〇九頁所収。

〔66〕現地語では「ウヌルオ・ダーホワイ」という。しかし、現在では、中国語である「寨老」と称する場合が多いので、本稿でも寨老と称してきた。なお、寨老とは「老人が集落を管理する」という意味である。かかる制度は、ミャオ族の場合、集落に一名から数名しか存在しないなどの理由から、近くに居住するトン族などの制度を導入したのではないかと考えられるが、詳細は不明である。また、ヤオ族の集落には、同様の「瑤老」あるいは「瑤老制」と呼ばれている制度が存在する。

〔67〕他のミャオ族の集落では山林に関する事件が度々発生し、寨老が仲裁することが多い。しかし、上棟東寨に関しては、山林の分配が明確であり、さらに一部の住民は所有する樹木に名前や記号を付けているので、事件は生じなかった。

〔68〕他の仲裁では、女性側は男性に対して豚肉七五斤かアヒル一羽と野生の山羊肉一五斤を贈ることに決定した。

〔69〕男性が他人の妻と駆落ちした場合、その妻の配偶者に一九〇斤の豚肉を贈ってつぐなわせた。

〔70〕その理由の一つに、詳細は不明であるが、上棟東寨の場合、山林が各戸に均等に分配されなかったことがあげられる。

※文中の写真はすべて、金丸良子が撮影したものである。